



Title	アルタイ型言語における感情述語
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	北方人文研究, 6, 83-101
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52614
Type	bulletin (article)
File Information	jcnh06-05-KAZAMA.pdf



[Instructions for use](#)

アルタイ型言語における感情述語

風間 伸次郎

東京外国語大学大学院総合国際学研究所

0. はじめに

本稿では次の2点を目的とする。

- ①感情表現における人称制限、を出発点としていくつかの言語の感情表現を対照する。
- ②人称制限が生じる理由について再考し、エヴィデンシャル（証拠性）の観点から若干の考察を行う。

1. 先行研究

本節の1.1.～1.5. では、日本語において論じられてきた感情述語の諸側面をみていく。そこでは感情述語の人称制限（1.1.）、人称制限と品詞（1.2.）、主観客観の両義性（1.3.）、感情述語の感嘆詞的性格（1.4.）、人称制限とエヴィデンシャル（1.5.）といった問題点に関する先行研究の指摘をまとめる。

最後に 1.6. では、対照言語学的・言語類型論的な観点から日本語以外の言語における感情述語の人称制限について考察している先行研究を概観する。

1.1. 感情述語における人称制限と、その解除の方法

多くの先行研究が指摘するように、日本語で三人称の人物を感情主体¹として文末に感情形容詞を使うには、-gar-u を用いるか、判断や推量の形式を伴わなければならない。なお本稿で用いる「感情」、「感情述語」という用語は感覚を含むものとする。

- (1a) (私は) {暑い／寒い／痛い／うれしい／悲しい／こわい}。
- (1b) ??あの人は {暑い／寒い／痛い／うれしい／悲しい／こわい}。
- (2) あの人は {うれしがっている／うれしそうだ／うれしいみたいだ}。

過去形にすれば用いられる、とする指摘もあったが、「その時太郎は、どんなだった？」
「うん、*? 水が欲しかった」のような会話が不自然なので、「太郎は水が欲しかった」
のような文は、物語の地の文のような「語り」の文である、と指摘されている（金水 1989）。

1.2. 人称制限と品詞

感情述語であっても、動詞であれば三人称で使える（彼は {喜んでいる／悲しんでいる}）。したがってこの問題はこれまででもっぱら形容詞の下位分類（感情形容詞 vs. 属性形容詞）の問題として捉えられてきた。感情を示す動詞は逆に一人称では使いづらいことも指摘されている（「?? ソウデスカ、私ハ大ヘンヨロコビマス」 寺村 1982: 143-144）。

しかし、「思う」などの動詞が感情形容詞と共通点を持ち、基本形では感情主体が話

¹ 以下では感情を感じる主体を「感情主体」、感情主体にそのような感情を引き起こす原因として働くものを「感情誘発主」と呼ぶことにする。

し手自身であることや(寺村 1984: 103-104)、テンスやアスペクトの面でも特異な性質を示すことが指摘されてきた。

山岡(2000)は、感情動詞にもその一部には人称制限があることを指摘した論考として重要である。山岡(2000: 176-177)では、感情動詞を三つに分類している(A感情表出動詞, B感情変化動詞, C感情描写動詞)。同じような意味でも、「腹が立つ」はA感情表出動詞で、「困った」はB感情変化動詞、「腹を立てる、怒る」はC感情描写動詞である。このうちC感情描写動詞のふるまいは一般の動詞と同じだが、A, Bには人称制限がある。すなわち、「あいつは腹が立つ」のような文では、「あいつ」を感情主体とする解釈は不可能である。判断や推量の形式を加えて、「あいつは腹が立っている{んだ/みたいだ}」のようにすれば成立する。

したがって、感情述語における人称制限は、主に形容詞において観察されるが、必ずしも形容詞に限られた現象ではなく、動詞の一部でも起こることが確認されている。

1.3. 主観客観の両義性

「こわい、さびしい、見える」などは、ある時は主観的表現になり、ある時は客観的表現になるというように、二面性を持つ。時枝(1950: 236-238)はこの類の語を「主観客観の総合的表現の語」と呼んだ。

このような両義性は、さまざまな場合に観察される。たとえば感情述語が連体修飾に用いられた際に、しばしば二つの解釈が可能になる²。

①被修飾名詞(底の名詞)がその述語の感情主体として解釈される場合:「皆さんの中には、お化けがこわい、なんて人はいませんか!? **こわい人**、いますか?」(筆者による作例)

②感情主体はあくまでも話者で、被修飾名詞(底の名詞)は感情誘発主として解釈される場合:「なにしろ私の上司は**こわい人**なんですよ」(筆者による作例)

感情述語が文末述語に用いられた場合にも、同じように二つの解釈を許す場合がある。「**あの人**はわからないよ。そもそもこちらのことを理解しようという気がないんだから。」

「いや～**あの人**はわからないよ。いったい何を考えているんだか。」(筆者による作例)

前者の文において「あの人」は感情主体として働いているのに対し、後者の文において、述語は話者の感情を示し、「あの人」は感情誘発主として働いている。

筆者は上記の連体修飾の場合について、ごく簡単なコーパス調査を行ってみた。すなわち、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)およびその検索ソフト『少納言』によって、「こわい人」、「悲しい人」、「うれしい人」の3語を検索してみたところ、次のような結果が得られた。

まず「こわい人」では、6例検索結果が得られたが、いずれも感情誘発主として解釈される例であった。一例を示す。

² 森田(2008)には形容詞の連体修飾の分類が提示されているが、そこではこのような問題は考慮されていないようだ。

(3) こわい人かなと思ったけど、おもしろい人だった。

「悲しい人」では、4 例検索結果が得られたが、3 例が感情誘発主として、1 例が感情主体として解釈される例であった。それぞれの解釈の例を示す。

(4) そういう人って、**悲しい人**だと思って無視してますけど。

(5) みんな元気になれるといいな、**悲しい人**も、苦しい人も、

「うれしい人」で得られたのは1 例のみで、感情主体として解釈される例であった。

(6) もちろん、「子どもらしくない文章だ」とか、「生意気なことを言う」と言われて**うれしい人**はいません。

本稿では、このような両義性に注目する。

1.4. 感情述語の感嘆詞的性格

北原 (2010)は、主観的表現を主体的表現（ああ まあ おや たぶん...）と客体的表現（喜び 悲しみ 喜ぶ 嬉しい...）に分けている。つまり感情述語を感嘆詞に近いものとみている。

たしかに、たいていの感情述語は感嘆詞的に用いることができる。その証拠に、そのような文では名詞項や助詞が現れにくくなり、テンスも中和されやすくなることが観察できる。

(7) *頭イテテテテテ！

(8) *鍋アッチッチ！

(9) これ {*が/?は} ますっ！

(10) う～頭に {来る／来た} ！

(11) こりゃ {困るよ／困った}

(12) いやあ、ホッと {する／した}

(以上筆者による作例)

1.5. 人称制限とエヴィデンシャル（証拠性）

エヴィデンシャルの観点からもこのような感情述語の人称制限は問題にされてきた。話者だけは直接自分の感情を知覚できるが、他の感情主体による感情を知るには、その主体の外側などから判断するほかはない。1.1. でみたように、日本語ではその知覚や判断の経路を言語形式によって明示する傾向をもつ。したがってこれがエヴィデンシャルの問題として扱われるのである。

Aoki (1986)は、-gar[-u], =no=da, =yoo=da, =rasi[-i], =soo=da を日本語における証拠性を示す形式として考察した。

定延 (2006) は「私は痛みを {感じる／感じている}」に対し、「彼は痛みを {??感じる／感じている}」のように三人称で非過去形が使いつらくなることを出発点とし、「ている」は「観察」という情報源を述べるエヴィデンシャルの意味を持つと指摘する。

1.6. 対照言語学的観点からみた感情述語における人称制限

上述してきたような人称制限は通言語的に観察されるもの、つまり普遍的なものなのだろうか、それとももっぱら日本語にみられることなのだろうか？

I am happy. He is happy. と言えることから、英語には一般に人称制限はないと考えられている。

これに対し寺村 (1982: 149) は、英語にもやはり日本語と似た制約があることを指摘している： It seems to me that you are crazy. * It seems to Pete that you are crazy.

神尾 (1990: 125-127) も、「英語と日本語とにおいて、心理文の許容度には確かに差があるが、... 本質的には同じ原理に基づいている」とし、「直接形で表現し得るかを決定するのは、... 心理文の表わす情報が話し手のなわ張りに属するか否かにかかっている」としている。次のような発話は、主語に身近な話し手が発話しなければプライベートシーを侵すような表現となるという。

(13) ?? Jack feels lonely.

(14) ?? Professor Smith is hungry.

一方、指導教員や弁護士であれば、職業的専門領域に属する知識なので次のような発話が可能だという。

(15) Jack is discouraged because his work has not progressed.

(16) He now feels very guilty about it.

近い親族であれば、その情報は話し手のなわ張りに属するので次のような発話が可能であるとする。

(17) 母はさびしいんですよ。

また催眠術師は被験者の心理に関する情報を自分のなわ張り内に持ち、かつそれを独占することが許容されているので、次のような発話が可能であるとする。

(18) あなたは楽しい。

このように神尾 (1990) は日英語における心理文が本質的には同じ原理に基づいていることを指摘しているが、他方で「日本語の場合には、英語とは異なり、身近な人物の心理状態を通常の直接形で表現することは一般的に不可能」(神尾 1990: 131) であることも認めている。

上原 (2011) は先行研究の記述に基づき、日本語を含む6言語(英語、朝鮮語、中国語、アンガミ・ナガ語(チベット・ビルマ語族)、ネワール語(同))の対照を行っている。中国語で感情の表出を表す「真 zhen1」を伴った表現には日本語の感情形容詞と同様の人称制限が現れる(wo3 zhen1 gaolxing4. 「私は本当にうれしい」 *ta1 zhen1 gaolxing4. 「彼は本当にうれしい」)。したがって中国語の表現は基本的に感情の客観的な描写であって、日本語のような感情の表出とは異なる。中国語と比べると、日本語の感情述語はより感情表出的であるという。アンガミ・ナガ語では、述語一般にはつかないが内的状態表現の述語形にのみ主語人称接辞がつき、その内的状態の主体の人称の区

別を明確に示す必要があるという。

少なくともモンゴル語と朝鮮語に感情形容詞の人称制限があることについては、風間 (2003: 295)ですでに指摘した。もっとも朝鮮語での人称制限に関してはそれ以前からすでにいくつかの論考で指摘されている。

2. 言語を対照する際のポイントと筆者自身による若干の考察

先行研究が取り上げてきた上記の問題点を踏まえつつ、本節では3節以降の対照言語学的調査におけるポイントを示す。以下ではまずそのようなポイントを取り上げた筆者の意図を説明する。

①人称制限は程度の差はあれ、普遍的なものか？ どんな言語にあるのだろうか？

モンゴル語と朝鮮語は日本語と分布域が連続しており、類型的にもよく似た統語原理を持つ言語とされている。このような特徴は**地域や系統、言語類型と何らかの関連を持つものだろうか？** それとも神尾 (2000)のいうように、程度の差はあれ普遍的な現象なのだろうか？ 日本語のように人称制限の厳しいタイプと英語のように厳しくないタイプとでは、どちらが多く見られるのだろうか？

②主観的な感情表現はなぜ主に形容詞によって表現されるのだろうか？ 他の言語での感情述語の形態論的な振る舞いはどのようだろうか？

日本語の動詞の **-(ru)** 形には意志、**-(i)te i-ru** 形には客観的な観察、というようなニュアンスが入って来てしまう。このような理由のせいで、動詞は感情表現に用いられにくいのだろうか？ 感情誘発主がもつ性質は、時間的にみてより恒常的なものだから、形容詞になりやすいのだろうか？ たとえ性質形容詞でも、それが示す意味は程度の差はあれ相対的で、主観の入る余地が大きいから形容詞になりやすいのだろうか？ しかし山岡 (2000)が指摘したように、動詞にも感情述語の性質を示すものは多くあり、さらに同じような意味の動詞でもその人称制限が異なるものもある。

世界の諸言語には形容詞が明確に区別されない言語もあるし、形容詞名詞型の言語、形容詞動詞型の言語もある。他の言語での**感情述語の品詞はどうなっているだろうか？**

③「主観客観の両義的な表現」は他の言語にも観察されるだろうか？

1.3. でみたように、「こわい人」、「あの人はこわいんだよ」などの表現は両義的である。ただこのように感情主体と感情誘発主の両方が存在し、しかも感情誘発主のほうがより積極的に感情主体に働きかけを行うような述語では、「主観的」な解釈がより自然であるように思われる³。「こわい人」のような連体修飾構造は、他の言語ではどのように表現されるだろうか？ そしてその表現において**両義的な解釈は可能だろうか？**

④他の言語で、感情述語は感嘆詞的に使えるだろうか？

1.4. でみたように、日本語の感情述語は、英語などの他の言語での感情表現が客観的

³ ただし直接この両義を主観と客観の対立とみることには問題があろう。

な判断として事態を描写しているのに比べ、より感情表出的なものであるようだ。感嘆詞的な性質が日本語における感情述語の人称制限の原因なのだろうか？ 他の言語でも感情述語はそのまま感嘆表現に用いることができるのだろうか？

3. 対照研究

3.0. 対照する言語

「アルタイ型言語⁴」として朝鮮語の他に、アルタイ諸言語からツングース語族のナーナイ語、モンゴル語族のハルハ・モンゴル語（以下モンゴル語と呼ぶ）、チュルク語族のキルギス語とトルコ語をとりあげる。さらに対照のためウラル語族のフィンランド語、インド・ヨーロッパ語族のロシア語の調査結果を示す。

3.1. 朝鮮語

この言語⁵における形容詞は形態論的にほとんど動詞と同じような振る舞いを示す。したがって大きくみれば動詞の下位分類とすることも可能だが、連体形などでアスペクト的に異なった接辞をとるので品詞としての形容詞は明確に分離されている。感情述語の大部分は形容詞で、上述のように人称制限がある。

- (19) *gy=nyn { de'u-e / 'ap-a / syr-p-e / muse'u-e. }
 (s)/he=TOP be.hot-IND⁶ / feel.pain-IND / be.sad-IND / be.afraid-IND
 「彼（女）は {暑い/痛い/お腹が空いた/悲しい/こわい}」
 「彼（女）」を感情主体とする解釈ではこの表現は成り立たない

三人称を感情主体で用いるには、動詞化したり、認識（観察）のモダリティ形式を加える必要がある。

- (20) gy=nyn { gibb-e ha-go 'iss-'e. / gibb-yn ges gat-'a }.
 (s)/he=TOP be.pleased do-CV be-IND / be.pleased-ADN thing be.same-IND
 「彼（女）は {うれしがっている/うれしいみたいだ}」

感情述語には動詞による表現もあるが、ここでも人称制限は観察される。

- (21a) hoa n-a!
 fire=NOM go.out-IND
 「（私は）腹が立つ！」
- (21b) *gy hoa n-a.
 (s)/he fire go.out-IND

⁴ 「アルタイ型言語」という用語に関しては、亀井・河野・千野編（1996: 28）を参照されたい。

⁵ 朝鮮語の転字は河野六郎（1979: 96-97）による。なお例文の文法性判断は複数の話者に確認したので、特にコンサルタントの情報については記さない。

⁶ 朝鮮語には待遇法による複雑な活用があり、-'a / -'e のグロスには正確には直接法略体下称とすべきものである。

「彼（女）は腹が立つ」

-‘a/-‘e ha-go ‘iss-‘e 「～がっている」は、その状況を直接見て言っている場合に用いる。gy=nyn muse‘u-e. は「彼は恐ろしい（人物だ）」の意で解釈される。muse‘u-n saram 「恐ろしい人」は両義的に解釈できる。日本語に比べると、一語による感嘆表現はかなり不自然である（例えば、??gibb-e! 「うれしい！」など）。

3.2. ナーナイ語（ツングース語族）

コンサルタントは1938年 nanajskij 地区 najkhin 村生まれの女性である。

ナーナイ語には -mo/-mu 「～したい」という、動詞から形容詞／名詞⁷を作る接辞がある。この接辞は主に制御不能な感覚・感情を示すのに用いられる。生産性はあまり高くない。一人称の感情主体を与格でとることができる。

- (22) mindu { jə-mu / ajakta-mo / iñə-mu / ila-mo⁸ / čiači-mu }.
 1SG.DAT eat-OPT / get.angry-OPT / laugh-OPT / be.ashamed-OPT / urinate-OPT
 「私は { 食べたい / 腹が立つ / 可らしい / 恥ずかしい / 小便したい }」

コンサルタントによれば、これらの述語に人称制限はなく、三人称の感情主体でも用いられる。

- (23) t̄ai nai-do { jə-mu / ajakta-mo / iñə-mu / ila-mo / čiači-mu }.
 that man-DAT eat-OPT / get.angry-OPT / laugh-OPT / be.ashamed-OPT / urinate-OPT

「あの人は { 食べたい / 腹が立つ / 可らしい / 恥ずかしい / 小便したい }」

さらに、派生語でない感情形容詞や、やはり動詞から形容詞を形成する -psi による感情形容詞があるが、その統語的振る舞いは上記の -mo/-mu によるものと変わらない。やはり人称制限はない。

- (24) { mindu / t̄ai nai-do } { pəku / nonji / jənuə / ənuu / ŋələ-psi }.
 1SG.DAT / that man-DAT hot / cold / happy / painful / be.afraid-ADJVLZ
 「{ 私は / あの人は } { 暑い / 寒い / 楽しい / 痛い / こわい }」

上記のうち一部のものは、主格の主語をとることができ、そのような感情を惹き起こさせる性質を持つ、ということを示す。

- (25) t̄ai nai { *jə-mu / *omi-mo / *ajakta-mo / *pəku }.
 that man eat-OPT / drink-OPT / get.angry-OPT / hot
 「あの人は { 食べたい / 飲みたい / 腹が立つ / 暑い }」

⁷ アルタイ諸言語に共通する特徴であるが、形容詞と名詞の境界は明確でない

⁸ ila-mo, jə-mu など、一部の動詞語幹部分は、化石化したり意味が変化していてそのままでは動詞として使えないものもある。

- (26) *təi nai* { *iñə-mu* / *ila-mo* / *ŋəələ-psi* }.
 that man laugh-OPT/ be.ashamed-OPT/ be.afraid-OPT
 「あの人は {可笑的い／恥ずかしい／こわい}」(見ているこちらがそう感じる)

この形容詞による連体修飾は、話者を感情主体とするものとしてしか解釈されない(被修飾名詞は感情誘発主として解釈される)。

- (27) { *iñə-mu* / *ila-mo* / *ŋəələ-psi* } *nai*
 laugh-OPT/ be.ashamed-OPT/ be.afraid-OPT man
 「(見ているこちらが) {笑いそうになる／恥ずかしい／こわい} 人」

-mo / -mu による形容詞は一語で発話されて感嘆文となり得る。

- (28) *jə-mu* (*manǰa*)! *omi-mo*!
 eat-OPT very drink-OPT
 「食べたい、すごく」 「飲みたい」

ajakta-mo! *čiči-mu!*
 get.angry-OPT urinate-OPT
 「腹が立つ」 「おしっこしたい」

3.3. モンゴル語 (モンゴル語族)

ここでいうモンゴル語とは、モンゴル国で話されているモンゴル語ハルハ方言⁹を指すものとする。コンサルタントは1988年 *övörxangaj* 県 *xajrxandulaan* 郡生まれの女性である。

モンゴル語の主要な文法書である Kullmann and Tserenpil (1996) や清格尔泰 (1991) には、形容詞の下位分類や、感情述語の人称制限に関する記述は確認できない。

モンゴル語の代表的な感情形容詞には、単純語であるものと、所有を示す -*taj*/-*toj*/-*tej* によって名詞から派生したものがある。

- (29) { *xaluun* / *bajar-taj* / *gunig-taj* / *uur-taj* } *baj-na* (*šüü*).
 hot / pleasure-PROP/ sorrow-PROP / anger-PROP be-FNT.PRS CONF
 「(私は) {暑い／うれしい／悲しい／怒っている} んだ (よ)」

他方で、動詞による感情述語も存在している。

- (30) (bi) { *xaluuca-ǰ* / *ölsö-ǰ* / *övdö-ǰ* } *baj-na*.
 I.NOM get.hot-CV.IMPF / get.angry-CV.IMPF / feel.pain-CV.IMPF be-FNT.PRS
 「(私は) {暑くなって／腹が立って／痛くなって} いる」

⁹ モンゴル語はキリル文字正書法からの転字によった。対応は下記のとおりである: a=a, б=b, в=v, г=g, д=d, е=je, ё=jo, ж=j, з=z, и=i, й=j, к=k, л=l, м=m, н=n, о=o, ө=ö, п=p, р=r, с=s, т=t, у=u, ү=ü, ф=f, х=x, ц=c, ч=č, ъ=ʹ, ы=y, ь=ʹ, э=e, ю=ju, я=ja.

なおこの転字は3.7. のロシア語においてもほぼ同様の物を用いたが、次の2字のみ別の転字にすることとした: e=e, ж=ž.

これらにははっきりした人称制限があつて、形容詞のみならず動詞の方も、基本的に三人称の感情主体では用いられない。用いる場合には *bajgaa jum šig bajna / bajgaa bololtoj* 「～であることのようにだ (後者の方がより口語的)」を加えて、話者の観察・判断を示す文にしなければならない。これを用いないと、(他人の気持ちを) 勝手に決めつけているような感じがするという¹⁰。

(31) *ter { bajar-taj / gunig-taj } baj-gaa jum šig baj-na.*
 (s)he pleasure-PROP / sorrow-PROP be-VN.IMPF thing as be-FNT.PRS
 「彼(女)は{うれしい/悲しい}みたいだ」(形容詞の例)

(32) *ter { xaluuca-ĵ / ölsö-ĵ / övdö-ĵ } baj-gaa bololtoj.*
 (s)he get.hot-CV.IMPF / get.angry-CV.IMPF / feel.pain-CV.IMPF be-VN.IMPF it.seems
 「彼(女)は{暑い/怒っている/痛い}みたいだ」(動詞の例)

なお「～したい」には *-maar/-meer bajna* という分析的な表現を用いるが、これにも人称制限がある。

(33) *ene nom-yg av-maar baj-na.*
 this book-ACC buy-CV.OPT be-FNT.PRS
 「(私は) この本を買いたい」

(34) **ter ene nom-yg av-maar baj-na.*
 (s)he this book-ACC buy-CV.OPT be-FNT.PRS
 「彼(女)はこの本を買いたい」

(35) *ter ene nom-yg av-maar baj-gaa bololtoj.*
 (s)he this book-ACC buy-CV.OPT be-VN.IMPF it.seems
 「彼(女)はこの本を買いたいみたいだ」

この *-maar/-meer bajna* に関しては Kullmann and Tserenpil (1996: 151) も、「二人称三人称についての使用はきわめてまれで、他人による言及を伝える場合にのみ使われる」として、用例を示している。

ajmaar 「こわい」、*bajartaj* 「うれしい」、*gunigtaj* 「悲しい」、に対しては、*aj-* 「恐れる」、*bajarla-* 「喜ぶ」、*gunigla-* 「悲しむ」、のような動詞があつて、これらは三人称の感情主体でも用いられる。

次に連体修飾についてみると、*gunigtaj xün* が「悲しんでいる人」の意であるのに対し、*ajmaar xün* は「恐ろしい人」であり、「こわがっている人」の意には解釈できないという。*xaluun xün* は「暑がっている人」ではなく、「興奮させるような人(セクシーな女性)」の意に解釈されると言う。

¹⁰ ただし、「うれしい/悲しい/(体の部分が) 痛い」などの述語では、話し手と聞き手の両方が今現在その三人称の人物の様子を直接見ている場合には言えるという。

一語で感嘆を示すことができるのは、もっぱら *ajmaar!* 「怖い！」ぐらいであるという。「痛ててて」には *joo joo joo*、「寒い！」には *tij tij tij*、「こわい！（ダメ！の意も）」にも *ij ij* という感嘆詞がある。

3.4. キルギス語（チュルク語族）

コンサルタントは1982年 *issyk kul* 生まれ *bishkek* 育ちの女性である。

やはり形容詞が与格の感情主体をとる構文があるが、人称制限はなく三人称でも使える。

- (36) { *maga* / *aga* } { *ışık* / *suuk* },
 1SG.DAT / 3SG.DAT hot / cold
 「{私は／彼（女）は} {暑い／寒い}」

動詞が主格の感情主体をとる構文には、現在形で表現するものと、分析的な表現による進行アスペクトで表現するものがあるが、いずれにも人称制限はない。外から観察して確信が持てない場合には、=go「～だろう」を用いることができるが、必須ではない。

- (37) *men it-ten kork-o-m.* / *al it-ten kork-o-t* (=go).
 I.NOM dog-ABL be.afraid-PRS-1SG / (s)/he dog-ABL be.afraid-PRS-3SG probably
 「私は犬を恐れる／彼（女）は犬を恐れる」

- (38) *men ujal-a-m.* / *al ujal-a-t.*
 I.NOM be.ashamed-PRS-1SG / (s)/he.nom be.ashamed-PRS-3SG
 「私は恥じる／彼（女）は恥じる」

- (39) *al* { *kubanı-p* / *koru-p* / *ačulanı-p* } *jat-a-t* (=go).
 (s)/he.NOM be.pleased-CV / be.afraid-CV / get.angry-CV lie-PRS-3SG probably
 「彼（女）は {喜んで／恐れて／怒って} いる (のだろう)」

「恐ろしい人」、「こわがっている人」には、それぞれ別の表現があり (*kork-unučtuu adam*, *kork-on adam*, とともに *kork-* 「恐れる」からの派生語)、両義性はない。*ışık* 「暑い」、*suuk* 「寒い」などは一語で感嘆表現を形成することができる。

3.5. トルコ語（チュルク語族）

コンサルタントは1988年 *çeşme* 生まれの男性である。

感情述語には、動詞によるものも形容詞によるものもあるが、どちらにも人称制限があるという。

- (40) (*benim*) *baş-ım* *ağr-ıyor.*
 1.GEN head-1SG feel.pain-PROG
 「私の頭が痛い」

- (41) *onun baş-1 ağr-iyor.
 3SG.GEN head-3 feel.pain-PROG
 「彼（女）の頭が痛い」

(41)のような発話は、まだ後に何か発話が続くような感じがして、そこで文を終えるのは不自然であるという。次の文のように、後ろに何らかの働きかけを示す表現が来ると文法的な文になるという。

- (42) onun baş-1 ağr-iyor, ses-siz ol-ø.
 3SG.GEN head-3 feel.pain-PROG sound-ABE become-IMP
 「彼（女）の頭が痛い、静かにしろ」

そうでなければ、三人称の人物の感情を示すためには、伝聞や推定、間接体験を示す *-miş*⁴ を用いて言う必要があるという（⁴ は母音調和による異形態の存在を示す）。

- (43) onun baş-1 ağr-iyor-muş.
 3SG.GEN head-3 feel.pain-PROG-EV/PERF
 「彼（女）の頭が痛いみたいだ」

次のような文は、母親が自分の子供の状況について言う時になら言えるという。このことは 1.6. でみた神尾 (1990) のなわ張り理論によって説明が可能である。

- (44) karn-1 acık-tı.
 stomach-3 empty-DIR.PST
 「(彼(女)の) お腹が空いた」

通常の発話では、やはり推量表現になるという。

- (45) onun karn-1 acık-mış.
 3SG.GEN stomach-3 empty- EV/PERF
 「彼（女）のお腹が空いたみたいだ」

次のような発話を単独で聞くと、他人の気持ちがどうして直接わかるのか、と感ぜられるという。これまでの経過や現在本人の置かれている状況を詳しく知っている親族であれば使用が可能であるという。

- (46) ??üzgün hissed-iyor.
 sad feel-PROG
 「(彼(女)は) 悲しく感じている」

その人の様子を見て言う場合には、次のような表現が可能であるという。

- (47) üzgün gör-ün-üyor.
 sad see-PASS-PROG
 「(彼(女)は) 悲しく見える」

次に連体修飾句において両義性が観察されるかどうかをみる。まず次のような表現では、被修飾名詞を感情主体とした解釈（「暑いと感じている人」）は許容されない。

(48) sıcak bir insan.

hot one person

「積極的で、人に親しく近づいてくるような人」

日本語で両義的になる「恐ろしい人」の二つの意味は、次の(49), (50)のように異なった表現によって訳し分けられる。しかも(49)は、話し手にとっての「おそろしい人」ではなく、あくまでも一般的にみて「おそろしい人」の意味であるという。

(49) korkunç bir insan

terrible one person

「(何人も人を殺したような人など) 恐ろしい人」

(50) korkak bir insan

fearful one person

「こわがっている人、臆病な人」

感情形容詞はある程度感嘆詞的に用いることができるという。

(51) çok üzgün-üm!

very feel.sad-1sg

「とても悲しい！」

(52) çok korkunç!

very fearful

「とてもこわい！」

3.6. フィンランド語（ウラル語族）

コンサルタントは1988年 sipoo 生まれの男性である。

フィンランド語の感覚形容詞には、(53)のように斜格の感覚主体をとる構文と、(54)のように主格の感情主体をとる構文があるが、いずれにも人称制限はない。なおこの言語の基本語順は SVO である。

(53) { minulla / hänellä } on { kuuma / kylmä / nälkä / jano } .

I.ADE / (s)/he.ADE be.3SG hot / cold / hungry / thirsty

「{私は／彼(女)は} {暑い／寒い／お腹が空いた／喉が渴いた}」

(54) { minä olen / hän on } { onnellinen / surullinen } .

I.NOM be.1SG / (s)/he.NOM be.3SG happy / sad

「{私は／彼(女)は} {うれしい／悲しい}」

「(私は) ～が こわい」は、他動詞 pelätä「怖れる」を用いて次のように表現される。

- (55) (minä) pelkään koiria.
 I.NOM be.afraid.1SG dog.PL.PART
 「私は犬を怖れる」

他方、恐怖の対象を表現しない場合には、他動詞 *pelottaa* 「こわがらせる」による無主語文で表現することができる。この時、OV 語順になる。しかしやはり人称制限はない。

- (56) { minua / häntä } pelottaa.
 I.PART / (s)/he.PART frighten.PRS.3SG
 「私をこわがらせる (意識：私はこわい)」

次に連体修飾についてみると、上記の動詞の対立に基づいたそれぞれの分詞形によって、次のように表現し分けることができる。

- (57a) *pelottava ihminen* 「恐ろしい人」 (57b) *pelkäävä ihminen* 「こわがっている人」

一方、*nolo ihminen* は基本的に「(一緒にいるとこっちが) 恥ずかしくなるような人」の意だが、「恥ずかしがっている人」の意に解釈することも可能であるという。

感嘆の表現には、上記の語とは異なる次のような感嘆詞がある：ai! 「痛い！」 hui! 「怖い！」

3.7. ロシア語 (インド・ヨーロッパ語族 スラブ語派)

コンサルタントは 1974 年 *sankt peterburg* 生まれの女性である。

主格の感情主体をとる形容詞や (再帰的な) 動詞による構文、与格の感情主体をとる (形容詞から派生した) 副詞による構文、があるが、いずれにも人称制限はないという。

- (58) on { rad / goloden / boicja / raduecja / grustit / stydicja }.
 3SG.NOM happy / hungry / be.afraid / be.pleased / sad / be.ashamed
 「彼は {うれしい／お腹空いている／怖い／うれしい／悲しい／恥ずかしい}」

- (59) { mne / emu }
 1SG.DAT / 3SG.DAT
 { žarko / xolodno / bol'no / radosno / grustno / strašno / prijatno }.
 hot / cold / painful / be.pleased / sad / be.afraid / comfortable
 「{私は／彼は} {暑い／寒い／痛い／うれしい／悲しい／こわい／快い}」

しかし、上記の形容詞は二種類に分かれる。{ *radosnyj / grustnyj* } *čelovek* は「{喜んで／悲しんでいる} 人」の意であり、*čelovek* 「人」は感情主体と解釈されるが、{ *strašnyj / prijatnyj* } *čelovek* は「{恐ろしい／感じの良い} 人」であって、*čelovek* 「人」は感情誘発主と解釈される。

より感覚的な述語は直接感嘆表現に使えるが (oj, *žarko / xolodno / bol'no / strašno* 「暑い／寒い／痛い／こわい」)、そうでないものは使えないという。

なお、本稿では特に具体例をあげて論じることはしないが、ペルシャ語についても話者から調査を行った。しかしペルシャ語でもやはり人称制限や両義性は観察されなかった。

4. 言語間対照のまとめ

3節でのアルタイ型言語における調査結果を表に整理すると以下ようになる。

表 1: いくつかのアルタイ型言語における人称制限およびそれに関連する特徴¹¹

	日本語	朝鮮語	ナナイ語	モンゴル語	キルギス語	トルコ語
人称制限 (Adj)	○	○	×	○	×	○
人称制限 (V)	○	○	×	○	×	○
両義性	○	○	×	×	×	×
感嘆詞的用法	○	△	○	×	△	△

基本的に一人のコンサルタントからの elicitation による調査であり、調査した感情述語の数もあまり多くないので、今回の調査で各言語の性格について最終的な判断を行うにはなお時期尚早であろう。しかし全体的にみて下記のような点が指摘できよう。

①人称制限は程度の差はあれ、普遍的なものか？ どんな言語にあるのだろうか？

今回の調査の範囲内では、日本語の他に、朝鮮語、モンゴル語、トルコ語において人称制限が観察された。同じ語族に属するトルコ語にあってキルギス語に無いので、語族内で一貫しているわけではない。地域的にも連続していない上に、アルタイ型言語の特徴ともいえないことがわかった。人称制限は、動詞に人称変化の無い言語に特徴的なことかとも考えたが、トルコ語には動詞の人称変化があるので、この仮説も成り立たない。

人称制限のある言語における感情述語が示す「感情」は、一人称である話し手と強く結びついており、それゆえにその述語自体がすでに主体的な判断を含んでいるように感じられる。したがって話し手でない感情主体の感情を示すには、そのニュアンスを引き剥がすために何らかの明示的な形式を必要とするものと考えられる。このことについては 5.1. でさらに詳しく考察する。

②主観的な感情表現はなぜ形容詞になりやすいのだろうか？ 他の言語での状況はどうだろうか？

どの言語でも感情述語には形容詞が多く現れた。しかし形容詞の性質は上記の三つの言語で異なっている。さらに動詞でも人称制限は観察される。品詞の違いと人称制限の間の強固な関連性は認めがたい。人称制限のある言語では、形容詞であろうと動詞であろうと人称制限が観察されるものと予想される。

¹¹ フィンランド語を「アルタイ型」の言語と見るべきかは難しい問題であろう。本稿の表 1 では、スペースの都合もあり、フィンランド語、ロシア語、ペルシャ語についての結果は入れないことにした。

③主観客観の両義的な表現は他の言語にも観察されるだろうか？

両義性の原因は、まず感情述語が二項述語階層（角田 2009: 101）において中間的な位置にあり、ここで格枠組みの多くが入れ替わったり、二通りの格枠組みを許容するという点にあると考えられる。さらに日本語などではコピュラ文や連体修飾の解釈（論理的構成）に大きな自由があることも両義性の原因であると考えられる。今回の調査で、人称制限のある言語であっても必ずしも両義性が観察されるわけではないことがわかった。両義性の原因には上記のうちの後者の理由が大きく働いているものと考えられる。

④他の言語で、感情述語は感嘆詞的に使えるだろうか？

日本語に比べると、一般に他の言語では使いにくいようだ。感嘆詞的性格と人称制限の関連を十分に支持する結果は得られなかった。しかしこの点に関してはさらなる調査が必要であると考えられる。

対照言語学的調査により、本稿の仮説に対する検討結果は否定的なものばかりになってしまったが、今後より多くの言語に関して調査を進めて行きたいと考えている。

5. 人称制限についての若干の考察

5節では、本稿で問題にしてきた上記のような感情述語における人称制限をどのように考えていくべきかについて、現在の筆者の若干の考えを述べる。

5.1. エヴィデンシャル的意味¹²＝「広義のエヴィデンシャル」

まず注目すべき点は、人称制限のある言語ではいずれも、「外から見て～と推測される」という形式、すなわち視覚情報源を明示する形式を後続させることによって、人称制限が解除できる、という点である。各言語の当該形式は次のようなものであった。

日： -(i)soo=da, 朝： -(y)n ges gat-'a, モ： baigaa bololtoj, ト： gör-ün-üyör

すなわち、(感情主体によっては)「情報源」を示す形式が必須になる、ということであり、情報の経路、すなわちエヴィデンシャルの問題であるということになる。先行研究の中にもエヴィデンシャルの問題としているものがあることについては、すでに 1.5. で触れたとおりである。

ただこれまで「エヴィデンシャル」という文法要素は、主に三人称の行為に対して、話者がその情報をどのような情報経路を通して得たか、という点に注目して使われてきたように見受けられる。さらに、その点に関して形の上で明示的な諸形式が対立する際に、文法カテゴリーとしてのエヴィデンシャルの存在が主張されてきた（例えば

¹² 「エヴィデンシャル的意味」は、「エヴィデンシャルティー (evidentiality)」と言っても同じことである。しかし、筆者は「アスペクチュアリティ (aspectuality)」、「テンポラリティ (temporality)」など -ity により名詞化した用語を日本語の文中で多用することは好ましくないと考えるため、このように呼ぶこととした。他方、単に「エヴィデンシャル」と言う場合には、形式と意味の両面からなる言語形式を指すものとする。

Aikhenvald 2004 など、これをいったんここでは「狭義のエヴィデンシャル」と呼ぶことにする)。

これに対し、「感情」は話者（一人称）に直接知覚されるものであるため、その情報源や経路を示す必要はない。したがって形の上では往々にして無標示だが、意味の上では他の一般的動作の述語とは大きく異なったエヴィデンシャル的な価値を持っていることになる。したがって三人称が感情主体となると、その情報源を示す必要性が出て来る。しかも言語によってはそれが必須のものとして要求される。

アスペクトという文法カテゴリーに関しては、次のようなことが言われている。すなわち、文全体が示すアスペクト的意味は、その述語動詞が語彙的に持っているアスペクト的意味（例えば結果動詞や限界性を持つ動詞、など）に文法的形式が持つアスペクト的機能（例えば日本語であれば、-(i)te i-ru 形の機能など）が作用することによって決定される。

筆者は、エヴィデンシャルに関しても同様に考えることを提案したい。すなわち、さまざまな述語において、そのそれぞれが本来持っているエヴィデンシャル的な価値は異なっており、これに一定のエヴィデンシャル的な機能を持つ文法形式が働くことによって文全体が示すエヴィデンシャル的な価値が決定されるのである（このように考えた場合のエヴィデンシャルは、「広義のエヴィデンシャル」と呼ぶことができよう）。述語の中でも特に感情を示すものは、上記のように特別な価値を持っているために、その表示が形の上で顕著に現れてくるのである。

したがって全ての述語と全ての言表事態は、意味の面でより直接知覚されるものからより間接的に知覚されるものまでの連続体をなしているが、そのうちのどの程度の部分を形の上に表示するかは、言語によって異なっているということになる。

5.2. 「広義のエヴィデンシャル」で機能する諸形式

では、日本語においてエヴィデンシャルは文法カテゴリーなのだろうか？ 文法カテゴリーであるとすれば、どの形式とどの形式がそれにあたるのだろうか？

日本語学での近年の先行研究を見ると、エヴィデンシャルをモダリティの下位分類としていることがわかる：「認識のモダリティの形式の類型の1つとして、何らかの証拠に基づく認識を表す形式類がある。（中略）その情報が何に基づくかということについての認識的な意味を「証拠性」(evidentiality) という」（日本語記述文法研究会編 2003: 163-164）

日本語記述文法研究会編 (2003)は、「証拠性」をこのように定義した上で、「ようだ」、「みたいだ」、「らしい」、「そうだ」、「という」などの形式のみを「証拠性」を示す形式として取り上げている。

しかし上述のような広義のエヴィデンシャルという考えに立てば、エヴィデンシャルを示す形式は必ずしも上記の形式に限られない。

例えば、梅野 (2011) は人称制限からテイタ形にエヴィデンシャルの機能があるとしている。

(60) {??私は/妹は} チョコを5個食べていた。

テイルは「観察」というエヴィデンシャルを示す、とする研究 (定延 2006) がある

ことについてはすでに 1.5. で触れた。

このように、一見するとエヴィデンシャルとは関係がないように見える文法的な諸形式も、文全体のエヴィデンシャル的な価値を決定するのに働いていることがある。形式ごとに、その意味から文法的要素や文法カテゴリーを定義するのではなく、エヴィデンシャルの機能を示す形式を、対立に基づいて広く洗い出して行くことが必要であると考ええる。単にアスペクトやテンスの形式とみなされていたものの中にも、エヴィデンシャルの機能を示す形式が多く存在していることが予想される。

北東アジアのアルタイ型言語には、日本語共通語における「発見のタ」、古文における「き」「けり」、琉球諸方言にあるとされているエヴィデンシャルの諸形式、朝鮮語の目撃法、トルコ語の *-miş*⁴ モンゴル語の *-jee/-čee* など、エヴィデンシャルとの関連が指摘されている形式が多く存在する。

今後は上記のような観点から、これらの言語における文法カテゴリーとしてのエヴィデンシャルについてのより体系的な研究を進めて行きたいと考えている。

略号一覧

ABE: abessive	EV: evidential (indirect)	PL: plural
ACC: accusative	FNT: finite form	PROG: progressive
ABL: ablative	IMP: imperative	PROP: proprietary
ADE: adessive	IMPF: imperfective	PRS: present
ADJVLZ: adjectivalizer	IND: indicative	PST: past
ADN: adnominal form	NOM: nominative	SG: singular
CONF: confirmation	OPT: optative	TOP: topic
CV: converb	PART: partitive	VN: verbal noun
DAT: dative	PASS: passive	
DIR: direct	PERF: perfective	

参考文献

上原 聡

- 2011 「主観性に関する言語の対照と類型」澤田治美（編）『主観性と主体性』東京：ひつじ書房. 61-91.

梅野由香里

- 2011 「完了相を標示するテイタと証拠性表現との関連性」『日本言語学会 第 143 回大会予稿集』日本言語学会. 202-207.

風間伸次郎

- 2003 「アルタイ諸言語の 3 グループ（チュルク、モンゴル、ツングース）及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか —対照文法の試み—」『日本語系統論の現在』日文研叢書 31. A. ボビン 長田俊樹 共編 国際日本文化研究センター. 249-340.

神尾昭雄

1990 『情報のなわ張り理論』東京：大修館書店

亀井 孝・河野六郎・千野栄一編

1996 『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京：三省堂

北原保雄

2010 『日本語の形容詞』東京：大修館書店

金水 敏

1989 「報告」についての覚書『日本語のモダリティ』東京：くろしお出版. 121-129.

河野六郎

1979 『河野六郎著作集第1巻』東京：平凡社

定延利之

2006 「心内情報の帰属と管理 —現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について—」中川正之・定延利之（編）『言語に現れる「世間」と「世界」』東京：くろしお出版. 167-192.

角田太作

2009 『世界の言語と日本語 改訂版』東京：くろしお出版

寺村秀夫

1982 『日本語のシンタクスと意味 I』東京：くろしお出版

1984 『日本語のシンタクスと意味 II』東京：くろしお出版

時枝誠記

1950 『日本文法 口語編』岩波全書 114 東京：岩波書店

日本語記述文法研究会（編）

2003 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』東京：くろしお出版

森田良行

2008 『動詞・形容詞・副詞の事典』東京：東京堂出版

山岡政紀

2000 『日本語の述語と文機能』東京：くろしお出版

Aikenvald, A. Y.

2004 *Evidentiality*. New York: Oxford University Press.

Aoki, H.

1986 Evidentials in Japanese. In Chafe and Nichols eds., 223-238.

Chafe, W. L. and J. Nichols eds.

1986 *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*. Norwood, NJ: ALEX Publishing Corp.

Kullmann R. and D. Tserenpil

1996 *Mongolian Grammar*. Hong Kong: Jenco Ltd.

清格尔泰

1991 『蒙古語語法』呼和浩特：内蒙古人民出版社

Emotional Predicates in Altaic-type Languages

Shinjiro KAZAMA

Graduate School of Cultural Studies, Tokyo University of Foreign Studies

Emotional adjectives cannot be used with the 3rd person subject in Japanese. This phenomenon is called as “person restriction”.

The aims of this paper are as follows:

- (1) To contrast the emotional expressions in several languages from the viewpoint of person restriction.
- (2) To reconsider the reason for the person restriction.

The result of elicitation is as follows:

Table 1: The restriction in person and related features in some Altaic-type languages

	Japanese	Korean	Nanai	Mongolian	Kirghiz	Turkish
Person restriction (Adj)	○	○	×	○	×	○
Person restriction (V)	○	○	×	○	×	○
Ambiguity	○	○	×	×	×	×
Use as exclamations	○	△	○	×	△	△

The conclusions of this paper are as follows:

- [1] The person restriction cannot be thought as any areal feature nor genealogic feature. And from the typological viewpoint, the appearance of the person restriction is not consistent in the languages of the similar type (in this case, Altaic-type).
- [2] The emotional predicates implicate some judgement of the speaker (i.e. 1st person). Therefore a kind of evidential markers is necessary to use an emotional predicate with a 3rd person subject.
- [3] The person restriction is observed not only in the emotional adjectives but also in the emotional verbs. Therefore the relation between the difference in word classes and the person restriction is not acceptable.
- [4] The ambiguous expressions of the emotional predicates (such as ‘*kowai hito*’ in Japanese) are not observed consistently in the languages which has the person restriction.
- [5] The emotional predicates are used frequently in the exclamational sentences in Japanese, but in the other languages not used so frequently as in Japanese.